

## W-2-6

### ワークショップ：最後のアナログ言語調査資料：危機に瀕した言語データの発掘と救出 菅原データ：初のコイサン自然会話コーパス

中川裕・木村公彦・加藤幹治（東京外国語大学）

#### 1. 人類学者による言語資料の記録

科研費プロジェクト「研究職を離れた言語研究者が保持する言語データの適正再資源化のための基盤確立研究」(18H00661)<sup>1</sup>がアーカイブ化を進めている資料には言語学者だけでなく、隣接研究分野の研究者が記録したアナログ・データも含まれる。この報告では、進行中の下位プロジェクト — 人類学者の記録した貴重な言語資料の電子アーカイブ化 — のひとつの事例をとりあげる。発表では、最初に、そのデータがもつ言語学的資料としての特色と価値を指摘する。ついで、この取り組みの具体的な手順と、必要な資源、取り組みの過程で浮かび上がってきた実践的・現実的な問題について述べる。

発表で扱う事例は、菅原和孝京都大学名誉教授が記録したカラハリ狩猟採集民グイ人の自然会話を主な内容とするカセットテープ録音・紙媒体フィールドノートのデジタル文書化である。菅原氏の記録したアナログ一次資料（ナマ資料）のメタ情報は発表の中で触れるが、その大きな特徴は、**自然会話**が資料のほとんどを占めることと、それがコイサン言語学ではもちろん、アフリカ言語学でも**最大規模**の量をもつことである。

#### 2. コイサン諸語のテキスト資料の現状

コイサン諸語のうちとくに狩猟採集民の言語は、その言語集落へのアクセスの困難さや現地調査の不便さという現実的な問題や、高度に複雑な音韻特徴のような言語構造の特殊性もあり、そもそも調査研究プロジェクトが比較的少なかった。そのため、アフリカの諸言語のなかでも、とくに言語学的ドキュメンテーションが乏しい言語グループだったと言える（Güldemann and Vossen 2000: 103）。ところが、最近 20 年ほどの間に、いくつかの大・中規模のコイサン諸語調査プロジェクト<sup>2</sup>が実施され、急速に音韻論、語彙、文法の記述の蓄積が進んだ。

しかしながら、テキスト資料の言語学的記録だけは未発達のみである。いくつかの言語で、伝統的な民話や神話、言語調査ツール（Frog Story や Pear Story など）によるテキスト作文、IPA illustration 用の「北風と太陽」の翻訳文、さらに、ひとつの言語で聖書の翻訳（ナ口語新約聖書）があるに過ぎない。これらは、語りの実演による変異・多様性はあるにしても多かれ少なかれ筋立てのきまっている物語か、彼らの社会の外部からもたらされた画像や映像によって人工的に引き出された話、ないしは非コイサン社会の物語のコイサン語訳であり、いずれにしても、自発的で自然な発話とは異なる。しかも、それらのテキストの規模はどれも小さい。

<sup>1</sup> <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18H00661>

<sup>2</sup> <https://www2.hu-berlin.de/kba/>

<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-16H01925/>

<https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-25300029/>

発表では、最近のコイサン言語研究におけるテキストの収集とその言語学的な文書化（未刊行資料を含む）に関して、発表者が進めている初期的な俯瞰調査の結果に触れる。それを踏まえると、本プロジェクトが手掛けている菅原データによるグイ語の自然会話テキストコーパスの貴重さとその規模の例外的な大きさが明らかになる。

### 3. 菅原氏の資料：フィールドノート（表記・和訳）と録音

菅原氏のグイ集落調査における言語資料の録音は1987年に始まるが、氏が自然会話を対象とする録音に本格的に取り組み、「IC リピートレコーダー」を使って母語話者研究助手の支援による文字起こし資料を蓄積したのは、1994年から2013年までである。菅原氏はこれらの資料を用いて、影響力の大きい研究成果を氏自身の研究領域で多数生み出してきた（e.g. Sugawara 2009, 2010）が、同資料は言語学の領域でも、従来実現できなかった調査研究を可能とする潜在性をもつ。この点は発表で詳しく触れる。

菅原氏のフィールドノートにおけるグイ語の表記は、発表者の中川が1992年に同じグイ語集落で言語調査を開始してから提案した音韻的表記法<sup>3</sup>（中川1993, Nakagawa 1996, 中川2004）に従っている。よって、菅原氏のフィールドノートの表記は、音の同定の間違ひは多々あるものの、その表記の意図は、中川にとっては、比較的判断しやすい（したがってどのような誤りかはわかりやすく、本来の単語の推測ができる場合が多い）。ただし、言語学者による表記ではないため、当然のことながら、形態論的に一貫している境界の表記などはない。

菅原氏のフィールドノートには見開き左ページにグイ語表記が、右ページに日本語でその対訳が記されている。この和訳は逐語訳ではなく、いわば自由訳で、また文法的情報はほとんど記録されていない。従って、菅原氏のフィールドノートから、慣習的な表記・グロス・自由訳という言語学的注釈付きテキスト文書までには、まだ遠い道のりがあるが、我々のプロジェクトによって、すべてのフィールドノートが画像ファイル化され、グイ語表記の約7割がテキストファイル化（校正待ち）され、対訳部分のテキストファイル化も終わっている。また、このフィールドノートの文字起こしの原資料であるアナログ録音はすべて音声ファイル化してある。

これら4種類のファイル（ノートのスキャン画像、グイ語表記のテキストファイル、自由訳のテキストファイル、録音のデジタル音声ファイル）は、これまでの作業工程では、それぞれ異なるアプリケーションで編集することが多かった。プロジェクトの最終年度に至り、ようやく、これらを統合しての編集作業、校正作業が始まりつつある。発表では、各資料の具体例を用いて作業工程などの模擬的実演を示しながら、実践的な諸問題を指摘する。

---

<sup>3</sup> IPAの改訂に応じて改訂を重ねたが、音素的解釈の結論は中川(1993)から変わっていない。

## 参考文献

- Güldemann, T. and R. Vossen. 2000. Khoisan, in Bernd Heine and Derek Nurse, *African Languages: An Introduction*, 99-122, Cambridge University Press.
- Nakagawa, H. 1996. An outline of |Gui phonology, *African Study Monograph*, supplementary issue (22) 101-124.
- Sugawara, K. 2010. Interactive significance of simultaneous discourse or overlap in everyday conversations among vertical bar G|ui former foragers, *Journal of Pragmatics*, 44(5): 577-618.
- Sugawara, K. 2009. Speech acts, moves, and meta-communication in negotiation: three cases of everyday conversation observed among the vertical bar G|ui former-foragers, *Journal of Pragmatics*, 41(1): 93-135.
- 中川裕. 2004. ギイ語正書法の改訂案 『東京外国語大学論集 67』 125-130.
- 中川裕. 1993. 「ギイ語初期報告」 『アジア・アフリカ文法研究』 22、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、 55-92.